



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	フィンランド史における「東方関係」 : 《研究動向の紹介》
Author(s)	百瀬, 宏; Momose, Hiroshi
Citation	スラヴ研究, 13, 111-129
Issue Date	1969
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/4997
Type	departmental bulletin paper
File Information	KJ00000112911.pdf



フィンランド史における「東方関係」*

——《研究動向の紹介》——

百 瀬 宏

は し が き

あるスウェーデン人の歴史家は、フィンランドの現代史に関するかれの概説書の序文で同国の政治を論じて、「北欧諸国よりは、むしろ中欧諸国を連想しがちな一連の劇的な対立がその政治に見出される」と評言し、またそこで歴史を考察することがもつ意味に触れて、「フィンランドにおいては、スウェーデン人が研究しても興味津々たる同国の最近代の出来事について論議が行なわれてきている。過去の見方において、フィンランドには、スウェーデンにおけるよりも大きな亀裂が常に存在してきたのであり、この分裂がまたスウェーデンには見られないような役割を、フィンランドの政治の上で果してきたのである」と述べている¹⁾。たしかに、6世紀以上にわたってスウェーデン王国に属していたフィンランドが、その文化、社会構造において、スウェーデン乃至いわゆるスカンディナヴィア諸国との基本的な類似を有しながらも、1918年の国内戦争をはじめとして、両大戦間期の極右運動の隆盛、また第二次大戦後の共産党乃至人民民主同盟 (SKDL) の進出²⁾に見られるような、他の北欧諸国には見出されない特異な現象にその歴史を彩られてきたことは、識者のしばしば指摘するところである。このようなフィンランドの特殊性をかたちづくってきた主な要因として、フィンランドが歴史上、スウェーデン乃至北欧の東部辺境に位置してきたこと、そしてなかんずく、ロシア・ソ連邦と境を接し、直接間接にその影響を受けてきた事実を無視できないとするならば、フィンランドの対東方関係の歴史を明らかにすることは、同国の歴史、あるいは現状を理解するうえで重要な鍵を提供するものといえよう。

第二次大戦後のフィンランドの歴史学界が示してきた顕著な傾向の一つに、ロシア乃至ソ連邦との関係史への関心を挙げることができるであろう。それは、フィンランドにお

* ここに「東方関係」としたのは、フィン語の“Idänpolitiikka”を意識してのことである。直訳的には「東方政策」となるであろうが、この言葉が使われる際の議論の文脈から、このような邦語をあてはめてみた。フィンランドの歴史学界で、とくにこの Idänpolitiikka が概念として用いられ、議論されているとはいえない。しかし、のちにみるように、筆者が関心をもっている問題がしばしばこの言葉を用いて論壇を賑わしており、筆者としても、本稿の議論の目的にかなった概念であるので、表題に用いることとした。

- 1) Krister Wahlbäck: *Från Mannerheim till Kekkonen; Huvudlinjer i finländsk politik 1917-1967*, Stockholm, 1967, S. 6.
- 2) 第二次大戦後、敵密には第二次ソ連=フィンランド戦争後 (1944年9月休戦) 合法活動を許されたフィンランド共産党 (SKP) は、他の左翼諸派と人民民主同盟 (SKDL) を形成し、200名の一院制国会議席の中、1958年には50議席をえて第一党となり、また1966年の選挙では、総投票数の21.2%、41議席をえ、3名の閣僚を入閣させている。

ける歴史研究の一般的な進展やソ連邦との文化交流の増大によって説明しうるであろう³⁾が、なお客観的な背景として、戦後のフィンランドの政治・社会の変化という具体的な事実の影響を否定することはできないであろう。第二次大戦後のフィンランドの政治・社会の変化をどのように評価するか、という事柄自身、同国の現代史研究上の大きな問題であるが、今、現象的な事実を観察に限っても、内政面では、両大戦間の時代に盛んであった極右運動や主としてソ連領東カレリアにたいする *irredentism* が戦後姿を消し、逆に戦前には非合法化されていた共産党が復活し、他の諸分子と人民民主同盟を形成して、現在ケッコネン Urho Kekkonen 大統領下の内閣に閣僚を送っているという、事態がある。同時に外政面では、第二次大戦後フィンランドは、ソ連邦と、1948年に「友交・協力・相互援助条約」(*ystävyyss-, yhteistyö- ja avunanto-sopimus*) を結んで、一面列強の利害紛争にたいする中立を国是とすると同時に、フィンランドにたいする、あるいはフィンランドを経由したソ連にたいする攻撃にたいしては、ソ連邦の援助をえてこれに抵抗する条約上の義務を負っている、という極めて特殊な国際的地位にある。こうした事情を念頭におきながら、以下に、第二次大戦後のフィンランドの歴史学界で現われてきた、対東方関係史研究の分野での業績や議論を、近・現代に焦点をあわせつつ、筆者なりのやり方で、紹介してみたいと思う。フィンランド史に関する十分な知識や展望を未だ欠いている筆者にとってこれはかなり冒険的な試みではあるが、たんにフィンランドのみならず、ひろくロシア・ソ連邦に隣接する諸民族の歴史や歴史観を検討するうえでの一材料として、この読書メモをご利用いただければ幸いである⁴⁾。

I. 諸業績の概観

1. カレリア史

この稿で考察の対象にしているのは、フィンランド史で「近代」とされている時代以降を扱った文献であるが、近・現代に関心をもつわれわれの立場からも注目し得る研究が近代以前についても現われているので、それをまず取上げておくこととしたい。ヘルシンキ大学の dosentti (=Dozent) である Heikki Kirkinen によって書かれた、『東方文化圏におけるカレリアービザンツ文化圏・ロシアとの接触から中世カレリアの成立迄』と題するモノグラフ⁵⁾がそれである。いったい歴史上頻繁におこってきたフィンランドとロシア

3) ソ連=フィンランド間の文化交流状況を歴史研究の分野について見れば、1956年に両国間に文書館史料の交換条約が結ばれ、1917年までのロシアの主要な政治家のフィンランド関係マイクロフィルムがヘルシンキの国立文書館に収められている(ただし、使用はフィンランド国民に限られている)。また1966年秋には、来芬したソ連の歴史家とフィンランドの歴史家との間に、1905年の革命を主なテーマとする研究会が開かれた。

4) フィンランドにおける近・現代史乃至は歴史研究の動向全般に関しては、フィンランド人の歴史家自身の手による下記のような紹介が外国の定期刊行物に掲載されているので、それらを参照されたい。本稿の目的は、そのような文献の網羅的な紹介ではなく、筆者なりの関心と角度から、フィンランドの歴史研究者の対東方関係観を整理しておくことにある。Еран фон Бунсдорф. Об исторической науке в Финляндии. «Вопросы истории», 1957, № 3, стр. 210-215; Tuomo Polvinen: „Zur Erforschung der jüngeren politischen Geschichte Finnlands“, *Jahrbücher für Geschichte Osteuropas*, Bnd. 13, Heft 2/Juni 1965, S. 231-246.

5) Heikki Kirkinen: *Karjala idän kulttuuripiirissä; Bysantin ja Venäjän yhteysistä keskiajan Karjalaan*, Helsinki, 1963.

の間の紛争は、カレリア地方 Karjala をめぐって行なわれてきたのであり、従ってカレリアの歴史はフィンランドの東方関係史の中核をなすともいえるのである。とくに两大戦間には、フィンランド人の間にソヴェト領カレリアにたいする *irredentism* が存在し、これがまたソ連の側にフィンランドにたいする深い疑惑の念を植えつけたのであった。Kirkinen は、このカレリア史の初期の時代について、その研究の中で、いくつかの新しい見解を提出しているのであるが、中でもわれわれにとって興味深いのは、カレリア人の起源を論じた部分であろう。カレリア人の起源に関しては、現在のフィンランド人の源の一つであるハマ人 *Hämäläiset* が東方に進出してラドガ湖西北岸に定着し、これに東からやってきた若干の原フィン人が加わってカレリア人が形成されたとする Jalmari Jaakkola らの見解⁶⁾ が従来定説となっていたが、これにたいして Kirkinen は、Jaakkola の推論には事実にもとづく判断以上のものが混入しているとし、逆に東から来た原フィン人の要素が強いと判断しているのである⁷⁾。そして、このようなカレリア人は、若干の西方的な要素を含みながらも、ノヴゴロド=ロシアとの経済的、軍事政治的結合を強めていったのである、と論じている。Kirkinen は、かれの見解がまだ仮説的な性格のものであり、問題の解決は今後の本格的な研究、わけでも国際協力的な研究にまつべきことをことわっているのであるが、それにしてもかれの主張は、従来定説と戦前のフィンランドの *irredentism* の論理的な関連を想起するとき、興味深いものがある⁸⁾。

そして、何よりも関心に値するのは、この論文全体を貫く著者の問題意識であろう。かれは序文の中で、従来カレリアの歴史は、あだかもカレリア人が西と東からそれぞれ暴力的に同化しようという試みの犠牲となってきたと同様に、フィンランドかロシアかいずれかの視点からのみ書かれてきた、しかし、カレリア史の正当な理解のためには偏見のない研究が必要である、として、「一面ではカレリア人自身の観点にまで入っていきながら、しかもあだかも全く無縁で遠隔の空間にある他の天体の住民が眺めるようなやり方で、検討」することが必要である、と主張している。さらに、Kirkinen は、かれがこの研究を思いついた動機がすぐれて今日的なものであったことを告白して、第二次大戦後ソ連邦に割譲されたフィンランド領カレリアの住民が引揚げられて各地に住むようになった時、一般のフィンランド人とカレリア人の伝統、習慣が甚しく異なり、カレリア人を一般のフィンランド人の社会に適合させるのが容易でなかったのを目撃したからである、と述べている。現在のフィンランド人の他の二大源流であるスオミ人 *Suomalaiset* やハマ人 *Hämäläiset* の研究が進んでいるのにたいして、研究のきわめて立ちおくれているカレリア史の分野で Kirkinen の仕事は先駆的な役割を目指したものであるが、ロシアにたいするフィンランドの辺境というカレリアについての従来のイメージを修正して、東西勢力の衝突の場、また東西文化のかけ橋、として再評価している意味で、かれの見解は専門研究者の範囲を越え

6) Jalmari Jaakkola: *Suomen varhaishistoria; Heimokausi ja "Kalevalan kulttuuri"* (フィンランド古代史——部族時代と「カレワラ文化」), *Suomen historia II*, Porvoo, S. 212-218.

7) 「その時、そこには、『チェード人』、西方からきたフィン人、ヴェブス人、それにもしかするとワリヤグも混り合いつつあったのだ。カレリア族が誕生したのであった」(Kirkinen, S. 35)。

8) たとえば、第二次ソ連=フィンランド戦争の際に Jaakkola は、次の書物を著わして、東カレリアが、フィンランドに包含されるべき旨を説いている。Jalmari Jaakkola: *The Finnish Eastern Question*, Helsinki, 1942.

て注目されているようである^{9),10)}。

2. 「大公国」時代

フィンランドは、スウェーデン王国の支配下に入ってから、同王国の東部辺境の州として、東漸する西欧乃至スウェーデン文化の恩恵を受けるとともに、スウェーデンによる対ロシア戦争の際の戦場、また人的資源の供給地としての苛酷な役割をにない、そのご19世紀初にロシア帝国に編入されて「フィンランド大公国」となったのであるが、この時以後をフィンランド史上、「近代史」として扱っている。この節では、この大公国時代のフィンランドの対東方関係についての近年出版の研究文献を見ることとしよう。

フィンランドは、スウェーデン王国から切り離されてロシアに割譲された時、スウェーデン時代の憲法、国家組織をそのまま平行移動させたかたちで、ただスウェーデン王に代ってロシア皇帝が「大公」として最高統治者となっただけの当面の変化を伴って、19世紀末までその自治の特権を享受したのであるが、このようなロシアとの関係がフィンランド自体の発展にとって如何なる影響を与えたかが、問題となっている。そして、19世紀前半の時代について、フィンランド大公国とロシア本国との政治関係を扱った Keijo Korhonen の『フィンランド委員会—1811-1826年におけるフィンランド最高行政府の規約と統治の実態』と題する研究¹¹⁾がありまた経済関係を扱ったものに、Kauko Joustela の研究『自治時代前半のフィンランドのロシア貿易, 1809-1865年』なるモノグラフ¹²⁾が出版されている。

まず、この前者、Korhonen の仕事であるが、この「フィンランド委員会」というのは、当時ペテルブルクにつくられた、ロシア帝国とフィンランド大公国の関係調整を司る機関であって、直接「大公」すなわち皇帝に責任を負っていたのであるが、その議長をつとめたアルムフェルト G. M. Armfelt, レービンデル R. H. Rehbinder といったフィンランド人貴族にたいするアレクサンドル1世の信任が厚く、フィンランドに駐在していたフィンランド総督の存在を影の薄いものにすらしていた。Korhonen は、この「フィンランド委員会」の機構とともに、アルムフェルト、レービンデルといったフィンランド人の行動、思考様式を研究しており、これらの人物が熱烈なフィンランド主義者であって、かつ、まさにロシア帝国との密接な関係においてフィンランドの主体性が育つと考えた点に特色があると、これを「官僚愛国主義的フィンランド主義」(Byrokraattispatriottinen

9) たとえば、フィンランド・アカデミー会員 Kustaa Vilkuna は、“Pre-Conceptions Corrected by Research; The Thousand Year Old Relations of Finland with the East”, *Look at Finland*, Winter, 1967/68, 16-17. なる一般外国人向紹介論文の中で、「フィンランドの歴史家は創造的なやり方で、東西双方の観点に立って歴史上の出来事を理解することができるようになった」として、Kirkinen の文を引用している。

10) なお、近代以前のカレリア史に関しては、このほかにも、Erkki Kuujo: *Raja-Karjala Ruotsin vallan aikana* (スウェーデン支配時代の辺境カレリア), Helsinki, 1963. がある。これは、スウェーデン側に組み入れられたカレリア地方の17世紀の歴史を扱っており、部分的に東方関係にも触れている。

11) Keijo Korhonen: *Suomen asiain komitea. Suomen korkeimman hallinnon järjestelyt ja toteuttaminen vuosina 1811-1826*, Turku, 1963.

12) Kauko E. Joustela: *Suomen Venäjän-kauppa autonomian ajan alkupuoliskolla vv. 1809-65*, Helsinki, 1963.

Suomi-idea) と呼んでいる。Korhonen は、これら貴族の活動を、のちに出現する民衆の間に基盤をもったナショナリズムを準備したものと考えているのであって、しかもそこでは「愛国主義」が「現実主義」において貫かれていた点を重視しているのである。この仕事は、これものちに紹介する Korhonen の東方関係史についての理論構成に反映することとなる。

次に、後者の Kauko Joustela の研究は、大公国時代になってから盛んになったロシア本国との交易がフィンランドの発展にどのような影響を及ぼしたかを検討したものであって、興味深い点は、これを単に経済面に限らず、フィンランド文化の発展といった面にまで視野をひろげて考えていることである。かれは、フィンランド大公国の輸出入総額の過半を占めるにいたったロシア貿易がもたらした結果として、(1)バルト沿岸諸都市、ロシア農村を市場とするフィンランド工業の育成(2)フィンランド農村における牧畜業の成長、(3)東フィンランドの経済の強化、(4)フィンランドの地域的較差の縮小、(5)ペテルブルク、タリン、リガなどとの交流による西欧的影響の享受、(6)行商人などを媒介とするロシア・東カレリア文化との交流、などを挙げており、結局かれは、「通商は人間の心から古い国境をきわめて速やかに拭い去った。民族感情の興隆期に、ロシア貿易はわが国の国内政治にすばらしい寄与をなしたのである」と結論している。

ところで、19世紀の後半になると、ロシア本国の農奴解放その他の間接的な影響も受けて、フィンランドにおける資本主義の発達はやや軌道に乗り、またフィンランド文化を民衆の間に育てようとする啓蒙運動も盛んになってくるのであるが、この時代のいわば文化的ナショナリズムとロシア支配の関係が、当然問題としてでてくると考えられる。従来フィンランドを支配する貴族はスウェーデン語を用いており、フィン語は農民の言葉であったが、ロシアの側からするならば、フィン語文化が育てばスウェーデンの影響力が薄れ、ロシアとフィンランドの関係が密接化するという利益があり、フィンランドの文化運動指導者も、この因果関係を意識的に利用している面がたしかにあったのである。前述の Korhonen らはこの面を強調しているのである¹³⁾が、19世紀中葉のフィンランドの文化運動をにない、フィンランドの偉大な指導者とされるスネルマン J. V. Snellman などの活動を、ロシアとの関係においてどのように評価するかは、今後に残された大きな問題であろう。

以上に見たようなロシア=フィンランド関係は、19世紀末から様相を一変していった。経済的にも両者は対立関係に立ちはじめるのであり、政治的には、ロシア帝国の側からのフィンランドにたいする「ロシア化政策」が始まり、一方フィンランドの側では、これに

13) 「フィンランド主義の指導者 J. V. Snellman の見解は、フィンランドは当時の政治的地位を守るために最善をつくすべきだ、というにあった。レアルポリテイクの観点からすれば、フィンランドをロシア帝国から分離するという考え方は、根拠のない夢想であった。さらにスネルマンは、フィンランドがとくにロシアと結合することによって真のフィンランド民族の国家として発展しうる可能性を充分にもちうるのだ、と主張した。……1850年代および1860年代にスネルマンが形成した対露政策路線は、フィンランド人官僚達が受継いでいたところのアルムフェルトーレービンデル路線に驚く程一致していた」(Keijo Korhonen: “Kansallisvaltiollinen linja [民族国家路線]”. *Suomen ulkopoliittikan kehityslinjat 1809–1966*, [フィンランド対外政策の発展路線 1809–1966]. Porvoo, 1966, S. 16–17.

たいする抵抗運動がおこって、それはやがてフィンランドの独立へとつながっていったのである。この「ロシア化政策」にたいするフィンランド人の対応態度は、通常三つに大別されている。すなわち、(1)「消極的抵抗」(Passiivinen vastarinta)—フィンランドの自治権=憲法の侵害にたいし非暴力的に抵抗しようとするもの、(2)「積極的抵抗」(Aktivismi)—前者の行き方に倦きたらず、暗殺や国際的な反露運動との提携に訴えんとするもの、(3)「譲歩政策」(Myöntövyys-politiikka)—ロシア側の要求にできる限り折合って事態を解決しようとするもの、である。両大戦間のフィンランドにおいては、これらの中、主流をなしていた消極的抵抗派、またとりわけ積極的抵抗派の華々しい功績が取上げられ、譲歩主義には帝政ロシアの権力にたいする屈従あるいはフィンランド人の利益の裏切りといった印象が一般につきまとうていたようであるが、第二次大戦後はむしろ、この譲歩主義の研究に関心が向けられるようになってきた¹⁴⁾。その主なものとして、Pirkko Rommi 著『ユルヨ=コスキネンの路線—フィン人党の活動路線としての譲歩主義の形成』¹⁵⁾、および Taimi Torvinen 著『フィンランドの自治の防衛者としての J. R. ダニエルソン=カルマリ』¹⁶⁾がある。いずれも、譲歩主義を奉じた代表的な政治指導者についての政治的評伝めいた仕事であって、これらの出現によって「ロシア化政策」時代のフィンランド政治史についての知識が、ようやく均衡のとれたものになったと、一論者は評している¹⁷⁾。いったい、一口に譲歩主義といっても、その内容はさまざまであった。その中で、ダニエルソン=カルマリを含む「3人執政」と呼ばれるフィン人党 *Suomalainen puolue*=保守党指導者は、国民のロシアにたいする抗議行動に理解を持ち、消極的抵抗派の行き方に公然と反対することを控えていた。これにたいし、ユルヨ・コスキネンは、譲歩主義を強硬に主張し、ロシアにたいする抵抗を破滅をもたらすと考えて排斥したのであった。しかも、そのばあい、ロシア政府にたいする譲歩政策は、フィンランド国内における尖鋭なフィンランド主義の推進すなわちスウェーデン語運動¹⁸⁾の抑圧と平行すべきものとして、考えられていた。このような主張の根底には、ロシアの帝国主義的な政策を運命的な必然としてうけとめる一方、たとえ自治権乃至政治的な存在を侵されたにしても、フィンランド人としての民族精神乃

14) 「ここ数年フィンランドの歴史研究の関心は、きわめて強く弾圧時代に向けられてきた。以前と比べて新しいことは、とくに、譲歩路線が綿密な研究の対象となってきたことである。以前には、主として、憲法党の活動とアクティヴィズムが解明されたが、これらは、きわめて積極的な評価を与えられ、それらのあるものは、『正しい』活動路線であるとされた程である」(Hannu Soikkanen: “Vuoden 1905 tapahtumat ja niiden taustakehitys suomalaisen tutkimuksen näkökulmasta” [フィンランド人研究者の視角より見た 1905 年の事件とその背景的発展], S. 1. なお、これは、前述の 1966 年のソ連=フィンランド歴史家間のシンポジウムに提出されたペーパーの一つである。

15) Pirkko Rommi: *Yrjö-Koskisen linja; Myöntövyösuunnan hahmottuminen Suomalaisen puolueen toimintalinjaksi*, Lahti, 1964.

16) Taimi Torvinen: *J. R. Danielson-Kalmari Suomen autonomian puolustajana*, Porvoo, 1965.

17) 前掲 Torvinen の著作についての Lauri A. Puntila の書評。 *Historiallinen aikakauskirja* [史学定期刊行物], 1965, No. 2, S. 167.

18) フィンランドにおいてスウェーデン語は支配層によって用いられていたばかりではなかった。スウェーデン語を日常語として用いる一般民衆もフィンランドのスウェーデン寄りの沿岸地方、とくに西南部に存在してきた。フィン=ウゴール語系統のフィン語を国民文化の基礎に据えようとする民族運動は、スウェーデン語を据えるべきだとする今一つの民族運動をよびおこし、両者間の「言語闘争」は、独立後も尾をひいたのである。

至民族的存在を保持すれば将来の発展が約束される、といった、かれ独自の世界観が存在していたのであり、しかもそこには、ヘーゲルの使徒であったスネルマンからかれが受けた思想的影響が窺われるのである¹⁹⁾。

上に挙げたところの、「ロシア化政策」にたいするフィンランド人の三つの対応の仕方の中で、どれがフィンランドの自治権乃至利益を守るのにもっとも効果があったか、という問題にはまだ答えが見つかっていないようである。1905年にロシアがフィンランドの権利を大幅に回復させた背景にしても、ロシアの国内情勢を含めた国際情勢の占める役割が大きく、フィンランド人自身の対露態度がどの程度貢献したのか疑問とされているように思われる。しかし、いずれにしても、第二次大戦後対ソ友好外交に手腕を発揮した大統領パーシキヴィ J. K. Paasikivi が「ロシア化政策」時代に譲歩派に属しており、ユルヨ=コスキネンの指導下に政治家として成長した事実が、歴史学の研究対象として譲歩派をクローズ・アップさせたことは、間違いない²⁰⁾。

3. 独立以後

フィンランドにおいては「現代史」(Oman ajan historia) という言葉は、普通、1917年の同国の独立以後の時代を対象として用いられている。このような現代史の研究は、第二次大戦後本格化してきた²¹⁾のであるが、この分野においても、対東方関係は重視されてきている。フィンランドの現代史研究においてもっとも重要な位置を占めているのは、1917年から18年にかけて起ったフィンランドの独立、国内戦争、また国際環境の中でのその位置などを、いかに評価するかという問題である。従来この問題をめぐっては、内戦の遺産としての国内対立を底に宿したはげしい見解の相違が存在してきたのであり、しかも両大戦間には、内戦当時の反革命の側の見解が支配的な風潮になっていた。そして、そ

19) 「ヘーゲルの影響は、また、ユルヨ=コスキネンが弁証法を歴史に適用する時、疑いもなく現われる。……ユルヨ=コスキネンによれば、歴史過程において統一と多様が交互に現われて行くのであり、普遍的な発展の連鎖には普遍国家形成の努力が対応し、多様性にたいしては諸民族の覚醒が対応していた。……まことにユルヨ=コスキネンは、歴史哲学を、確信をもって、現下の政治情勢にも適用した。そのばあい、当時のロシアの対フィンランド政策は普遍的な発展傾向の現われであると結論された。正義や真理にたいするそれぞれの時代の見方は相対的なものであるに過ぎず、偉大な目的を実現しつつある歴史は諸民族の自由や権利にたいして何の同情ももたない以上、フィンランドの政治的抵抗は無益であった。その代り、もろもろの発展段階の次に新しい生命の可能性が開けるように、普遍的な発展の時代には、手段をつくして民族性の擁護に努めねばならぬ。……従って、[弾圧時代=普遍的発展の時代には] 国家の権利は放棄せざるをえないが、その代り、言語に根ざす民族性は強化されねばならなかった」(Pirkko Rommi S. 227-228)。

20) 「1957年に出版された J. K. パーシキヴィの弾圧時代に関する回顧録は、それ以前からすでにかきたてられていた譲歩路線の根拠を明らかにしようという関心を生み出し、かつ増大させた。かれの回顧録においてパーシキヴィは、譲歩主義者の立場が以前よりも理解されるように努力し、自治の擁護にたいするかれらの貢献を強調しようと努めた。以前には、一般に、自治の擁護における譲歩主義者の効力は、全く否定的なものであったと考えられていた。パーシキヴィは、大国とそれに隣接する小国の問題という観点から弾圧時代に [歴史叙述において] アプローチした最初の人である」(Soikkanen S. 1)。

21) 「現代史」の分野における個々の業績のみならず、現代史研究の方法やあり方の検討・議論もまた行なわれている。1966年には、政治史、政治学、社会学の研究者間に現代史研究の原則や方法の問題をめぐるシンポジウムが生まれ、その成果が、次のようなかたちで発表されている。*Oman ajan historia ja poliittikan tutkimus* [現代史と政治研究], Helsinki, 1967. なお、ヘルシンキ大学の場合、これら三分野の学科は、いずれも国家学部 Valtiotieteellinen tiedekunta に属している。

のような政治的イシューとしての事柄の深刻さのゆえに、学問的な研究の対象としてこれを扱うことに、一種タブー的な雰囲気が存在してきたことも否めないようである。しかし、第二次大戦後ようやく、この問題をめぐる直接的な政治的緊張感が解けはじめ、また従来の支配的な見解にたいする反証の文献が刊行され、また内戦当時の革命政権の支持層の立場を扱った文芸作品が一般読者の心情をもとらえるにいたった。さらに昨年から今年にかけて、独立と内戦の50周年を機に関係史料の編集公刊、内戦参加者の体験記の叙述や一般向叙述、研究書などの刊行が、相次いで行なわれた。以下、本稿でのわれわれの関心の範囲において、これらの文献を取上げることとしよう。

第二次大戦後のフィンランドにおける独立史および内戦史の本格的研究の口火を切ったのは、現在トウルク大学の政治史の教授である Juhani Paasivirta である。『1917年のフィンランドの独立問題』という表題のもとに、1947年から49年にかけて二巻に分けて出版されたモノグラフ²²⁾がそれであって、たんに該問題についてのみならず、フィンランドにおける現代史研究一般という意味でも、先駆的な業績であったといえることができる。このモノグラフの序文で、かれは、フィンランドの独立問題が、それをめぐる多くの出版物の出現にも拘らず、いずれも党派的に偏したもので、歴史の科学的研究の対象とならなかったとして、かれのいうところの公平な観察者の立場から、フィンランドの国立文書館をはじめ、政党関係のアルヒーフなどの老大な史料に立脚して、独立事情を詳細にフォローしているのである。さらにかれは、1957年には、続巻的な性格をもつ『1918年のフィンランド』²³⁾を刊行して、独立をとげたのちの国内戦争前後のフィンランドの内外事情の再構成を試みている。これらの一連の仕事を通じて、Paasivirta は、かれが、そこに示されている内戦の評価の仕方によって、それぞれ、「独立戦争文献」(Vapaussotakirjallisuus)、「階級戦争文献」(Luokkasotakirjallisuus)として名付け分類するところの従来の出版物の生み出した神話を批判しているのであるが、現実にはかれの作業は、明確な政治的意図を以て書かれた後者の「階級戦争文献」—これには、フィンランドの共産党関係の出版物が大部分を占める—よりは、両大戦間のいわば支配的な風潮の中で生み出されたさまざまな「独立戦争」文献によってかもし出された常識にたいして、具体的な事実による反論を加えている点できわだつ結果となっている。

「独立戦争文献」にたいする Paasivirta の批判の核心は、それらが、内戦における革命派を、独立に反対であり、フィンランド駐留のロシア軍と結託してフィンランドをロシアとの結合に留めておこうとした、祖国への裏切者としている点と、これらと戦った反革命派のみを「独立の闘士」として賛美し、ロシア本国政府の弾圧にたいするフィンランドの権利擁護の闘争における社会主義者の貢献を認めようとしない、という点²⁴⁾にたいして向

22) Juhani Paasivirta: *Suomen itsenäisyyskysymys 1917, I Maaliskuunvallankumouksesta valtakäsiin*, Porvoo, 1947.

23) Juhani Paasivirta: *Suomi vuonna 1918*, Porvoo, 1957.

24) こうした主張の一例として、白衛軍側の立場に立った次の見解をあげることができるであろう。「この運動[革命側の運動]は社会的なものではなく、政治的なものであった。[内戦]はプロレタリアートとブルジョアジーの間の紛争ではなかった。それは赤色分子にとっては権力のための闘争であり、白色分子にとってはフィンランドの独立、法と秩序のための闘争であった。それは、国家と民族を何者とも思わぬ狂信的な国際運動と、祖国の神聖と、社会の共同生活を守るものとの間の戦争であった」(Henning Söderhjelm: *The Red Insurrection in Finland in 1918*, London [1919], p. 157).

けられている。歴史叙述の構成の面からいえば、フィンランドの独立闘争史の重点が1918年春の出来事、すなわち内戦におかれて、それに先立つ時代の独立運動とか、国内戦争後に列国からの独立承認獲得の努力が行なわれた時代を二義的なものとしか考えない、偏頗な欠陥を生んでいると述べている。Paasivirtaは、かれの労作をつうじてこれらの従来明らかにされなかった空白を埋めているわけであるが、とくにわれわれの関心事、すなわちロシア革命との関連について Paasivirta の批判と主張を整理するならば、(1) 1917年12月6日のフィンランドの独立宣言以前の時期については、Paasivirtaは、「独立戦争文献」はブルジョワ諸党派の立場を一色に塗りつぶしているが、実際には、護憲闘争—フィンランドの自治権擁護の闘争—に止まるべきか、それとも独立を目指すべきかをめぐってかれらは分裂しており、これは、ロシア臨時政府との協力か、それとも独自の行動か、という重要な分裂であった、と批判し、他方、社会民主党はロシアの労働者諸党の援助によって独立を獲得しようと努力しており、とくに1917年7月にフィンランド国会が臨時政府の承認なしに可決した「権力移譲法」(Valtalaki)は、社会民主党によって推進されたものであることを強調している。(2) フィンランドが独立を宣言した前後の事情については、フィンランドの独立の直接の背景としてロシア革命があることを示唆して、「フィンランドのロシアよりの分離」は、「ロシア革命によって生れた情勢によって成熟した政治活動の結果であった」としている。(3) 国内戦争に関しては、フィンランドの革命政権の蜂起はフィンランドの国内事情に起因すること、またこれにたいするソヴェト政権の援助は、武器その他物資の供給が主であって、フィンランドに駐在していたロシア軍そのものとしては、一部の例外を除いて、ほとんど援助しなかった、としている。こうした Paasivirta の仕事は、対象となった一連の事件にたいして全面的な、かつ多岐にわたる問題を提出したものでありそのごころしたテーマを扱って出版された専門研究文献は、結果的には Paasivirta が提起した諸問題のそれぞれを具体的に検討する形になっている。

それらの中で、フィンランドとロシア革命あるいはソヴェト政権との関係—これは、これら諸研究のいずれにおいても、ある意味では基本的な問題として意識されているのであるが—を正面から扱ったものとしては、1967年に刊行された Tuomo Polvinen の書いた『ロシア革命とフィンランド』と題する研究²⁵⁾がある。これは、フィンランド側のアルヒーフ、文献はもとより、ソヴェト側の文献も広く参照して、1917年の二月革命から1920年のタルトゥ Tartu 条約によるソヴェト・フィンランド間の国交正常化にいたるまでの両国の関係を包括的に叙述しようとしたものである。Polvinen は、この研究を思いついた動機を説明して、自分は以前に書いた第二次ソ連=フィンランド戦争(1941-1944)中の列強とフィンランドの関係を扱ったモノグラフの中で、結論として、ソ連=フィンランド関係における「双方の側の不信が支配する壁」の存在を指摘し、かつ続けて、かかる現象が出てくるにいたったその歴史を、かれの言葉によると、「一度徹底的に、手術の痛みを敬遠せずに、厳密に客観的に明らかにすべきである」と書いたけれども、その時以来、自分の注意は、ソヴェト政権と独立フィンランドが誕生し、のちの発展への基礎が作り出されたところの、1917年から1920年にかけての革命時代に向けられてきたのだ、と述べている。こ

25) Tuomo Polvinen: *Venäjänsä vallankumous ja Suomi 1917-1920*, Porvoo, 1967.

の研究は、今迄のところ、1918年5月までを扱った第一巻しか出ておらず、従って著者による研究成果の総括に接することはできないのであるが、この巻をつうじて、もっとも重要と思われる論点は、かれが、ソヴェト政権のフィンランド独立承認にたいして与えている評価であると思われる。ロシア臨時政府が戦争遂行という目標を掲げて、そのためにフィンランドとの関係の解決を引延ばしていたのにたいし、ボルシェヴィキが民族自決の方針を打出すことによって、フィンランド人の民族的な要求に答えていたこと、またソヴェト政権がフィンランドの独立を承認することによって、列国による承認の糸口をつくったことを Polvinen は認めているが、同時に、こうしたロシア革命政権の態度は、社会主義革命の実現を容易にせんがためのリアリスティックな戦術であったことを指摘し、「本来的にはレーニンが緊急の措置としてとった行動 [フィンランドの独立承認] が、そのごの歴史の転変をつうじて、両国の共通の利益にもとずいた関係を作り出す礎となったのである」と述べている。

Polvinen の著書が恐らく続刊で扱うであろう 1918年から20年にかけてのソヴェト=フィンランド関係の一側面として、フィンランド人の東カレリアにたいする irredentism とそれに基づく遠征、およびこれと列強の対ソ干渉戦争とのからみ合いの問題があるが、これをテーマとしたモノグラフが出ている。それは Mauno Jääskeläinen 著『東カレリア問題』²⁶⁾ であって、著者の言によれば、長らく国民各層の間に対立をよびおこし、また対ソ関係を紛糾させていた「東カレリア問題」が「歴史の中へと移行した」条件の下で、「事象の冷静な観察」を志したものである。カレワラ叙事詩の多くがその地で発見されることによって民族的覚醒を促がされたフィンランド人の東カレリア乃至同系民族としての東カレリア人への関心が、国際的な力関係の変動期に、文化運動から「大フィンランド」(Suur-Suomi) の実現を希う政治運動へと成長していった過程を明らかにしているが、結論として、「フィンランドでは、領土拡大の計画が、大国の犠牲において実現されることになる、という点に注意を払わなかった。ロシアが早晚復活し、フィンランドの侵略の東の間の成果を無に帰せしめるばかりか、その結果フィンランドの独立を危険に陥れることが明らかであったにも拘らず、ソヴェト=ロシアの一時的な弱さやボルシェヴィキ権力の崩壊の可能性に期待がおかれたのだ」と述べ、その理由をフィンランドの当時の対外政策上の未経験に求めるとともに、「このようにして、フィンランド民族の偉大さを目指した白日の夢は、政治的現実の前に潰えざるをえなかったのである」と論じている。

タルトゥ条約以後の両大戦間のフィンランドの対ソ関係を扱ったモノグラフとしては Keijo Korhonen の『不本意な隣国同士—タルトゥ条約から冬戦争に至る間のソヴェト外交とフィンランド』第一巻²⁷⁾ が出ている程度である。主としてフィンランドの外交文書に立脚しているがヒトラーの権力掌握前夜で終わっている。外交史的な手法で事実を手堅くフォローしているが、注目されるのは、かれが序文で次のような議論をしていることである。「疑い深い歴史家は、ソ連邦史に関する情報資料がひとひねりもふたひねりも事実を歪曲し

26) Mauno Jääskeläinen: *Itä-Karjalan kysymys; Kansallisen laajennusohjelman synty ja sen toteuttamisyhteydet Suomen ulkopoliitikassa vuosina 1918–1920*, Porvoo, 1961.

27) Keijo Korhonen: *Naapurit vastoin tahtoaan: Suomi neuvostodiplomaatissa Tartosta talvisotaan I 1920–1932*, Helsinki, 1966.

てしまっていると見ている²⁸⁾。たまたま手に入った史料も価値が少ないか人を誤るものだと、主張している。読むべき一次史料は厳重に保管されている。アルヒーフの秘密の場所からショッキングな秘密が見つかるだろう、と疑い深い歴史家は示唆する。それらが知られてはじめて客観的な歴史を書くことが可能になるのだ、われわれは『ソ連のアルヒーフが開かれる迄』それ故待たねばならぬ、と。疑い深い歴史家はこういう断定にまで議論を徹底させるが、これは『沼が干上る前に鶴が死んでしまう』という古い諺を丁度思いおこさせる。そして、米英仏などのソヴェト研究を例にひいて、フィンランドの歴史家がこうした思考から脱却すべきことを説いているのであるが、これもフィンランドの学界のソ連観の現状を窺わせて興味深いものがある。

以上のほか第一次・第二次ソ連=フィンランド戦争に関して、フィンランドの対外関係を扱ったものが、いくつかモノグラフとして出ている。これらもそれぞれに注目すべき問題をはらんでいるが、とくに対ソ関係のみを主題にしているわけではないので、本稿では割愛し、別の機会に検討することとしたい。

II. 東方関係史像をめぐって

1. 一つの東方関係史像

以上において、フィンランドの東方関係史の諸側面について、第二次大戦後のフィンランドで、いかなる問題関心から、いかなる研究が行なわれてきたか、という点を、概観したわけであるが、それでは、そのような諸問題を含むフィンランドの東方関係史なるものを、全体としていかに把握すべきか、という問題が、フィンランド人として当然に起るのであろう。かかるテーマを対象としたモノグラフ的な労作は、管見のかぎり、まだ現われてはいない。しかし、比較的短い論文のかたちでは、この問題がすでに論じられてきており、しかも、現在フィンランド国民が直面している問題状況を切実に踏まえたかたちで、論争も行なわれてきているのである。

フィンランドの東方関係史に関して、全体像を大胆に組立てている点で注目されるのは、前節においてもその業績に触れた Keijo Korhonen である。1963年に出版された『過去150年間の諸路線』*Linjoja puoleltatoista vuosisadalta* (Turku, 1963) と題するその論文は、50ページほどの小冊子であるが、その内容は、歴史の新解釈を打出そうと試みたもので、大きな反響を喚び起したといわれる。以下、簡単にこの論文を紹介する。

冒頭において Korhonen は、歴史から「教訓」がいかにして学ばれるべきか、という問題を提起している。通常啓蒙的な目的で行なわれているのは、過去の時代や国の出来事の中から適当な例を見つけ出して、「教訓」をそこから導き出す、というやり方であって、これは実は、そうした出来事を借りて、論者自身の世界観を説くことに過ぎない。ところ

28) このような「疑い深い歴史家」を揶揄して、Korhonen は、次の笑話をたとえにひいている。「今は昔、ペテルブルクであった話。毛皮商のワシーリが仲間で商売仇のイワンに道でばったり会った。イワンの櫛には商売の袋が一杯積んであり、長旅に出かけるところだと判った。『兄弟、これからどこへ行くんだ』とワシーリがたずねた。『やあ、アルハンゲリへ毛皮を買いに行くところさ』。それを聞いてワシーリは怒った。『兄弟、俺に嘘をつくな。本当はお前はアルハンゲリに毛皮を買いに行くんだらう』(Korhonen S. 11)。

が、歴史における「連続性」(jatkuvuus, kontinuiteetti) というものを問題にするとなると、事柄は別となる。ここに Korhonen が「連続性」という言葉で言い表わしているものは、歴史の発展から独立しているところの「歴史外在的な要因」、たとえば「地理的要因」といったものの影響によって一貫した連鎖を形づくっている出来事の、そうした連続性のことである。そして、かれは、もし歴史的なかかる「連続性」が現在の時点まで存在しているとするならば、過去におけるその発現の仕方を明らかにすることによって、現代を理解する よすが を得られるであろう。また、この意味においてはじめて、人は「歴史的な教訓」なるものを語るができるであろう、と論じている。

このような前置きのもとに、Korhonen は、過去 150 年間のフィンランド・ロシア間の政治関係にどの程度「歴史的な連続性」が見られるか、を検討する目的で、フィンランドがロシア帝国内の「大公国」となった 1809 年から、フィンランドの独立を経て、現在にいたるまでのフィンランドの対露対ソ関係を概観している。この概観自体かれの独自の解釈を示す点が少ないのであるが、何よりも興味深いのは、そうした作業からかれがひきだした結論を述べている部分であろう。それによれば、フィンランド・ロシア関係には、「継続性」が一貫して認められるのであって、このことは、ロシアの側については、統治権力が皇帝であろうと、ソヴェト政府であろうとにかかわりなく、フィンランドにたいして「その基盤においては同様な政策」をとってきたこと、またフィンランド側の対ロシア政策には、「フィンランド的=現実的路線」(suomalais-realistinen linja) と「西方国家路線」(länsimainen linja) の二つの方針が存在してきたこと、に見出される。そして、この「継続性」を保証している「環境的要因」としては、(1) レニングラードの安全とかかわるフィンランドの地理的位置、(2) バルト海におけるロシアの地位を脅かす中・西欧方面よりの脅威、(3) 自由主義・民族主義・社会主義といったヨーロッパの大きな思潮のロシア・フィンランドへの同時的投影、(4) フィンランドにおける民族的自覚の発生、が挙げられうる。さて、このような要因のもとでロシア乃至ソ連の対フィンランド政策に存在してきた「継続性」について、Korhonen は次のように述べる。「ロシアの対フィンランド政策は、アレクサンドル一世からフルシチョフにいたるまで非常に首尾一貫してきた。イデオロギーではなく大国の地理的利益がこれを指導してきた。フィンランドが辿るコースはロシアの対外政策の主要目的からすれば二次的な事柄なのであって、ロシアは、西北国境の安全確保といわれらからすれば自衛的な目標に向って努力してきたに過ぎない」。もっとも、「ロシアはその勝手口の番人が務めを果すように仕向けることができると考えた限りにおいて、フィンランドの内政の発展を制限することは止むをえないこととしてきた」。しかもそのばあい、ロシアはフィンランドの法制度にも内政と外交の弁別にも興味を持たないという全体主義的な観点から、フィンランド人の側からは内政干渉と見做される活動をもあえて行なったのである (この例として、第一次大戦前の「ロシア化政策」と 1939 年のソ連=フィンランド戦争が挙げられている)。

次に、フィンランドの対露・対ソ政策に関しては、さきに挙げた二つの方針が人的な継承によって続いてきたことを指摘するとともに、それぞれの路線の特徴づけを試みている。まず、「西方国家路線」を担ってきた指導者は、クヴァンテン Emil von Qvanten—メ

ヘリン Leo Mechelin—スヴィンビューヴド P. E. Svinhufvud の系譜であって、それぞれ、19世紀後半のスカンディナヴィア主義者・自由主義者—20世紀初の憲法党 perustuslailliset—両大戦間フィンランドの支配的風潮を代表する。これらの人々に特徴的なのは、(1) ロシアにたいする疑惑、(2) 西方の利益を守る尖兵としての自覚、(3) 東にたいし西のイデオロギーを守る意識、(4) 法律的な思考様式、(5) 東方文化圏・ロシアにたいする優越感、(6) ロシアを犠牲として民族的拡大政策の機会を窺う傾向、(7) ヨーロッパ列強の力関係に倚ってロシアの影響を減少させようという願望、(8) ロシアの弱体化を利益とする機会主義的思考、である。これにたいし、「フィンランド的=現実的路線」を担う指導者は、レービンドル Robert Henrik Rehbinder—スネルマン Juhana Vilhelm Snellman—パーシキヴィ Juhon Kusti Paasikivi らであり、それぞれに、19世紀前半の官僚愛国主義—19世紀後半のナショナリズム—第二次大戦後のフィンランド政界の主流を代表する。この路線は、次のように特徴づけられる。(1) フィンランドをロシアの周辺国と見做し、ロシアの強国としての安全保障政策に順応すべし、とする、(2) ロシアのフィンランドにたいする要求を安定したものと見る傾向 (3) ロシアやその政策を理解しようとする努力 (4) ロシアの要求にたいする弾力的態度 (5) 自国を西方文化圏と東方の政治的影響圏の衝突地点と見做す (6) ロシアとの問題を二国間だけのものとして扱う努力 (7) イデオロギー上の面倒を避けたいという願望 (8) ロシアの弱味につけこむ危険な政策を避ける。

以上のような Korhonen の議論は、未だ試論の域を出るものではなく、今後の綿密な検討に待つべきものであろう。

しかし、かれの問題提起がはなはだ興味深い意味をもつことは、かれが論文の最初の部分で触れている執筆意図からも、明らかである。Korhonen は述べている。「これからも続いていくところの [第二次大戦後の——百瀬補] フィンランドの東方政策が、フィンランドの完全な市民権をもち、それにたいして責任を負っているはずのわれわれの中の多くの者にとって、何と理解困難なことか。これは驚くべきことである。この政策に容易に適應できないのは、少なくとも部分的には、やはり、知識が乏しいためだ、と思われる。現在の東方政策の支持者も批判者も、フィンランド国民が何かしら新しく未経験な状況の中に生きている、と見ているが、これもまた驚くべきことである」。Korhonen によれば、現在の東方政策は実際には過去に源流をもっているものであって、こうした事柄が、歴史の専門家は別として教科書や一般人の知識教養には盛り込まれていなかったことには、歴史家もまた責任を有するのである。こうした叙述から察せられるように、Korhonen は第二次大戦後のフィンランドの国際的地位にたいする一般国民の理解を深めさせるための、いわば啓蒙の仕事を、東方関係史に関するかれ独自の解釈をつうじて意図しているのである。

フィンランドの現代史乃至近代史の全体像の問題にたいする Korhonen の関心は、1961年にトゥルク大学の学生新聞に寄せた論文 (*Turun Ylioppilaslehti* 14. 4. 1961) の中に、つとに現われている。そこでかれは、第二次大戦前の独立フィンランド、すなわち両大戦間のフィンランドにおける近代史研究のあり方を強く批判して、当時のフィンランドでつくられた歴史像は、「実用的・政治的なものであって、科学的なものではなかった」とし、両大戦間の時代を含めた近代史の研究にあたっては、第二次大戦後の新しい時代に

において、「先立つ時代にたいするアンチテーゼを求め」ようとする意識的な努力をなすことをつうじて、科学的な新しい観点を樹立すべきであると、主張している。そしてかれは述べている。「たとえば Juhani Paasivirta の『1918年のフィンランド』という研究をとりあげてみよう。この研究者の問題提起の能力は、かれの反体制の態度と直接の関係があるのであって、この態度にもかかわらず、否まさにその故にこそ、その成果の中核的な部分は、批判に耐え、かつゆるぎない地歩を確立したのである」。また、かれは、次のように述べている。「わが国の歴史上、1917-1944年の間の時代は、政治、社会、思想の諸面でひとつのまとまりをなしているので、この時代について『第一共和政時代』(ensimmäisen tasavallan aika) という名称が用いられているのは、まったく正しい。『第二共和政』(toinen tasavalta) の新しい政治的、社会的、経済的基盤は、第二次大戦後の数年間に驚くほどの迅速さで形成されたのであって、これは実に、われわれの気付かぬ裡に起った革命とさえいえるものであった。ところが、精神状況の変化は、これに立ち遅れていた。あるいはわれわれは、現在ようやく、思想の注目するに足る歴史的崩壊の時代に生きているのであって、しかもその崩壊の速度はついこの頃増したに過ぎないのかも知れない」。そして、この「精神のニュー・ディール」の先頭を切っているのが、現在中年になっているところの1930年代の「反体制派」か、もしくは、その頃に生れた若い世代で、「第一共和政時代の主観主義的な思想をもたない層である」といっている。

ここで Korhonen がいっている「第一共和政」という言葉は、フィンランドの評論家 Matti Kurjensaari が1948年に出版した自伝的なエッセイ『明日のためのたたかい』²⁹⁾の中で初めて用いた名称である。「もし1918年と1944年の間のフィンランドを第一共和政と呼ぶとすれば、その後のフィンランドはこれを第二共和政と呼ぶ十分な理由がある」³⁰⁾。Kurjensaari は、1930年代のフィンランドで極右運動が隆盛であった時、進歩党左派の機関紙 *Nykypäivä* に拠ってファシズム批判の筆を振り善戦していた。そして、第二次大戦直後の時点において両大戦間のフィンランドを回顧し、将来のフィンランドのあるべき姿を論じた評論をあらわしたのである。そこでかれは、民族的感情の亢進の時代を反省したフィンランドが、今後国内的には社会的進歩、対外的には隣国ソ連邦との友好に意を用いるべきことを説いている。「現在のフィンランド人は、批判的な知性よりもより多く感情のとりことなって迂余曲折の道を歩んでいる。こうした類いの大波が第一共和政からやってきて、第二共和政の平坦な岸辺に強く打寄せている。だが、30年代の悲喜劇的な自惚は致命的打撃を受けた。戦後のフィンランドにおいては、独立以来一般にそうであったよりもいくらか多くの敬意が、隣国の特性、慣習にたいして払われている」³¹⁾。Kurjensaari によるこの呼称は、その後、歴史家の間で注目されるようになり、またさらにひろく現在の Kekkonen 政権のもとである程度の市民権をえているようである³²⁾。そして Korhonen が

29) Matti Kurjensaari: *Taistelu huomispäivästä*, Helsinki, 1948. ただし、以下引用にあたっては、1967年に Helsinki で出版された Kurjensaari 選集第四巻を用いることとする。

30) Sama S. 195-6.

31) Sama S. 199.

32) 1967年12月、Helsinki の Messuhalli (展覧会ホール) で行なわれた独立記念式典において、Kekkonen 大統領は、この呼称を使用している。

「1930年代の反体制派」と呼んでいるのは、この Kurjensaari らにほかならない。

2. その批判

第一節において紹介したような、第二次大戦後のフィンランドにおける主として近代史研究の中に窺われる一定の傾向、また以上にみたような東方関係史の大胆な解釈にたいしては、全体的な批判や反対意見もまた、さまざまなかたちで提出されており、その影響力も無視しえないものがある。たとえば、1958年に雑誌『フィンランド人のフィンランド』*Suomalainen Suomi* (No. 1, 1958) に掲載された匿名の歴史家による論文は、「大戦後の事態や雰囲気、外交的・軍事的地位の変化、および内政舞台の急激な一新【筆者はとくに共産党の進出を意味している―百瀬註】」といった中で、第二次大戦後のフィンランドが自身について「歴史像」を作ってきたことを認めながらも、そこには「多くの誤った評価」も存在しているとして、「大公国」時代末期のフィンランド人のロシア政府にたいする対応態度に関しては、消極的抵抗派の闘争は国民のモラルの背骨と反抗意志を支えたのであり、この派がフィンランドで支配的であったからこそ、譲歩主義も花を咲かすことができたのであって、後者だけを高く評価するのは間違いである、と論じており、また1918年の出来事については、国内戦争を戦ったどちらの側もフィンランドの独立を心に描いていたことは間違いでないが、この戦争が（ロシア軍をフィンランドの領土から排除することによって）フィンランドの独立という成果を達成したという結果は尊重しなければならない、と主張している。

しかし、このような個々の具体的な問題に関する批判を踏まえながら、Korhonen の東方関係史像にたいして正面から反論を加えている代表的な発言として、Kauko Kare の論文がある。Kare は、歴史家、評論家、ジャーナリストとして多才な文化活動をしている人物であるが、1967年に出版された『事態はここに至った―パーシキヴィ路線より K 戦線へ』*Tähän on tultu; Paasikiven linjalta K-rintamaan* (Helsinki 1967) なる自著に収められた「変貌する歴史像」(“Vaihtuvat historiankuvat”) と題する論稿がそれである。この論文の中で、Kare は、Korhonen を「歴史の改新者」と呼び、次のように述べている。「[Korhonen の] 論稿は平和的な色合いを帯びており、提出されている問題は、まさに現今の標準型フィンランド人の情緒に強く訴えるので、私の見聞したところでは、本来は批判的な考えを抱きうるはずの国民層の間からも共感を以て迎えられたのであった。まして素人の誰が、論稿を読んで、方法の問題に思いついたであろうか。Korhonen は、小冊子の中で、あらかじめ論証しようと考えていたことを論証しているのに過ぎないのである。歴史の骨組を、全く逆の形で組立てることも大いに可能であろう。Korhonen は、アルムフェルト―レービンデル―スネルマン―ユルヨ=コスキネン―パーシキヴィ―ケッコネンの対東方譲歩路線を造り出して、アルヴィドソン A. Arwidsson―クヴァンテン―Emil v. Qvanten―メヘリン Leo Mechelin―スヴンヒューヴド P. E. Svinhufvud の反東方路線をこれにたいする対立物として設定している。両方の『路線』とも同様に架空のものである。アルヴィドソンやスネルマンやユルヨ=コスキネンのような激しいフィンランド主義者達に対東方観においてもまた、多くの点で全く意見を一つにしていたことを明らかにしなければならない。冷静な貴族出身のレービンデルやメヘリンといったスウェーデ

ン系の自由主義者が、少なくとも基本的な政治的態度においてお互いに対立していたとは見做しえない。またもし、クヴァンテンの計画にスカンディナヴィア主義があったとするならば、パーンキヴィの計画にもたしかに含まれていたのである。名門出のアルムフェルトと『農民の子』ケッコネンの間はどういう共通性があるのか私には判らないし、またこれはわれわれの記憶にあるところだが、クヴァンテンがほんのしばらくスカンディナヴィア主義を信奉したのは、ケッコネンがほんの一時期、つまり1940年の3月と1943年9月に西欧強国の援助を当てにしたのと同じことなのである」。多分に皮肉な調子で書かれているこの論評は、反証的に挙げている事実がいささか断片的であって、Korhonenの議論と正面から噛み合っていないうらみはあるが、それにもかかわらず、Korhonenの、乃至はこれに類似した東方関係史観にたいする反対意見を、管見のかぎりもっとも適切に代弁したものである。

ところで、Kareの論文は単に以上のような、史観にたいする内容的な批判に止まらず、Korhonenらが批判の対象としている両大戦間の時代の歴史研究の評価に関してもまた、反駁を加えている。「このもっとも新しいわが東方政策の『歴史学上の』弁護者達は、『第二共和政』と、言葉の上ではパーンキヴィということになっているが、実際にはケッコネンの大統領時代に暗黒の第一共和政の『反動的な』歴史文献にとって代ったところのその『近代的な』歴史文献について語るを常としている。だが、E. G. Palmén, Danielson-Kalmari, Väinö Voionmaa, Eirik Hornborg, Herman Gummerus などのような、わが国の近代史研究上のすべての偉人達は、『第一共和政』の研究者に属しているのであり、その教え子はまた現在のわが国の指導的歴史家達、Arvi Korhonen, Eino Jutikkala, Pentti Renvall らなのである。かれらもまた、東方政策の研究においては明瞭に理性的な態度を持してきたのであり、この態度は、フィンランド人の平和的な、適切な、合憲的な、民主的議会主義的な立場にもとずいているのである」³³⁾。そしてさらにKareは、上記の歴史家が活動した背景としての両大戦間のフィンランドについても、極右運動だけに注目するのは誤りであるとし、この時代には「国民の教育や生活水準の力強い向上といったもっと重要な、はるかに重要なことが前面に浮上ってくる。疑似急進主義者の幾人が、これらの『暗黒の反動』の年々が、社会政策の大きな前進の時代であったことについて知っているであろうか。世界恐慌が惹起した失業は比較的速やかに克復され、老齢年金制度が制定され、いくつかの社会保険、労働協約立法、労働保護、民生保護、児童保護が発展させられ、またこれらの領域での北欧諸国との協力のための基礎が作り出されたのである」³⁴⁾。

実は、このKauko Kareの著作は、ケッコネン政権の文化政策全般にたいする批判を目ざしたものであり、そのそれぞれの側面を扱った諸論文から成っている。東方関係に関する「新史観」を扱ったこの論稿は、いわばケッコネン体制の歴史学の分野でのイデオログと見做された人々にたいして向けられた批判であり、現在のフィンランドにおける反ケッコネン政権勢力=保守派の立場を反映している。論文の中でとりわけ興味深いのは、Korhonenが、さきに引用したように、近代史研究の成果は反体制的な姿勢をとることによ

33) Kare S. 102.

34) Sama S. 103.

って生れてくる、と述べている点をとらえて、「Keijo Korhonen は、自分自身の反体制的立場をいかにして用意するのであろうか。かれこそは政府の同調者である」と断じていることである。新しい史観を反体制的な姿勢の中でうちだそうとしている者が、逆の立場からは、支配体制を代弁していると論難されるところに、現在のフィンランドの思想的状況、またつきつめて行けば、ケッコネン政権の当面する状況が現われているともいえるのである。

むすびに代えて

最後に本稿で見てきたようなフィンランドの歴史学界の動向が、諸外国のフィンランド史研究者の眼にどのように映じ、またどのような影響を与えてきたかを簡単に見て結びに代えることとしたい。まず、フィンランドにおける東方関係史の研究状況にもっとも関心を払うべき立場にあると思われるソ連邦の歴史家についてみるならば、1966年に『歴史の諸問題』誌に、A. C. Жербин. Некоторые новые тенденции в современной финляндской буржуазной историографии. («Вопросы истории», 1966, No 8) なる動向紹介が掲載されている。そこでは、「方法および目的の点でフィンランドのブルジョワ歴史家は、ブルジョワ文明の遺産を熱心に守っている。フィンランドのブルジョワ歴史文献は全体としてマルクス=レーニン主義に敵対する思想であることを止めず、歴史における人民大衆の主導的役割や階級闘争を無視している」としながらも、「知っての通り、ここ20年間にフィンランドの対外政策の方針に顕著な変化がおり、その結果フィンランド=ソヴェト関係が強化された。新しい歴史的条件の下でフィンランドのブルジョワ歴史学は、国史の個々の問題の解釈をめぐる従来のその露骨に反動的な見解を再検討せざるをえなくなった」、として1965年にフィンランド=ソ連友好協会のスウェーデン系住民支部会で、両国関係の歴史の再評価、マルクス主義にたいする見方、歴史教育の問題、ソ連歴史学者との交流などが提案討議された例を紹介しつつ、「すべてこれらのことは、現在のフィンランド社会の広い層が、フィンランドとソ連の現今の関係を強化して行くような、歴史的過去の客観的な解明に関心をもっていることを、証拠だてている」と述べている。次いで Жербин は、「実際フィンランドでこうした見地に立った研究は近年活潑化したのであり、多くがまさに、フィンランド史学の当面する新しい課題を扱う方に属しているのである。このようにして、歴史研究上の構想のいくつかの改新が企てられた。フィンランド史の新しい時代の当面の問題を扱った、以前の保守的な概念から部分的に脱した仕事が増加した」として、1917-18年当時のフィンランドの内外政を扱った仕事、およびフィンランドとロシアとの関係を扱った作品をとりあげている。いずれも比較的簡単な概観がなされている中で、カレリア史を扱った Erkki Kuujo と Heikki Kirkinen のモノグラフには入念な紹介が試みられ、とくに Kirkinen の研究が注目されている³⁵⁾。

35) Жербин が Kirkinen の研究を評価しているのは、「この仕事は、何よりも著者が、カレリア人の起源やノヴゴロドの版図内でのカレリアの発展を解明するにあたって、フィンランドの歴史研究文献でははじめて、ロシアで出版された史料を、革命前・ソヴェト時代の両方にわたって広く利用した点で、フィンランドで出版されたカレリア史についての他の多くの書物と異なっている」点にある。またかれは、Kirkinen が「カレリア人があだかも『西方から生じた』かのように、つまりハマ人の末裔であるかのようにいっているフィンランドの歴史家の古い概念」を拒否して、ソ連の考古学者 Б. И. Равдоникас の見解と「基本において一致」している点に注目している。

次に、フィンランドの近・現代史研究において幅広く、かつ多くの研究業績をもち、またその研究者にフィンランド系市民をもつアメリカの学界に目をむけてみよう。この国のフィンランド史研究者の動向を示すものとして、John H. Wuorinen によって書かれたフィンランド史の概説 *A History of Finland* (New York, 1965) にたいして、Marvin Rintala が加えた論評 (*The Russian Review*, Vol. 25, No. 2 (April, 1966), 212-213) を挙げておこう。Wuorinen はすでに 1931 年に近代フィンランドのナショナリズムの歴史を扱ったモノグラフを出版した、アメリカにおけるフィンランド史研究の先駆者であり、この概説書は、かれ自身がその序文で告白しているように 30 年以上にわたる研究の総決算ともいふべきものであろう。ところで、Rintala は、書評の中でとくに 1917-18 年の諸事件に関する Wuorinen の叙述をとりあげて次のように評している。「Wuorinen の最大の弱点は、1917-18 年のロシア=フィンランド関係の扱い方にある。たとえば、1917-18 年のフィンランドの政治に関する Juhani Paasivirta の老成かつ決定版的な研究を読んだものが、いかにすれば「独立戦争」と題する一章を書くことができるのか、想像しがたいところである。フィンランドにとってはもとより、また世界にとっても恐らく幸いなことに、ロシアのボルシェヴィキは、1918 年はじめには永久革命の大義にかけるだけの貴重な資源を国内に一国外は無論のこと一殆んどもちあわせていなかった。……1918 年にはフィンランドの歴史にこの上なく重要な事件として残る激烈な国内戦争はあったが、ロシアとフィンランドの間の戦争は実はなかったのである。Wuorinen 自身が認めているようにロシアの成立直後のボルシェヴィキ政府は、フィンランドの独立の可能性を否定しなかったばかりでなく、その独立を最初に承認した政府なのであり、ロシアもフィンランドも 1918 年には互いに宣戦布告するようなことはなかったのである」。Paasivirta の仕事をアメリカにおける「独立戦争」観の批判にあたって典拠とする評論は、Wuorinen 以外の研究者の仕事にたいする書評においても見られるところであり、その価値は高く評価されていると思われる。

しかし、ここに興味深いことは、Rintala らのいわば新しいフィンランド史研究者が、より一般的なフィンランド史そのものの見方、あるいはヨーロッパ史におけるフィンランドの位置づけにおいてもまた、Wuorinen らの古参研究者といちじるしく距った見解をもっていることであろう。Rintala は同じ書評の中で述べている。「フィンランドがスカンディナヴィアかそれとも東ヨーロッパかという問題は、フィンランド事情の研究者の間でしばしば討議されている。言語的にはそのいずれでもないし、宗教と社会構造の上ではスカンディナヴィアである。もし東ヨーロッパを、ロシアとの関係がこの上なく重要な問題である地域と定義するならば、政治上、ことに国際政治的な意味で、東ヨーロッパである。……Wuorinen はフィンランドの歴史を、殆んどまったく、文字通りの Finland、つまり 1809 年以前のスウェーデン王国の『最涯の地方』の歴史としてみている」。実はこの Wuorinen は、さきに Anatole G. Mazour が *Finland between East and West* (New Jersey, 1956) と題するフィンランド史の概説書を刊行したとき、フィンランドを東西両世界の混合物として扱うという変則的な叙述の誤りをおかしていると批判し、フィンランド史を北欧史として認識すべき旨を説いたのであるが、ここでは、かれがいわば常識として考えて

フィンランド史における「東方関係」

きたところのフィンランド史観が「フィンランドのスカンディナヴィア的な面の極端な強調」のゆえに斥けられているのである。そして、フィンランドを「文化的には北欧乃至西欧、政治的には東欧」に属すると見做す見方は、最近のアメリカのフィンランド研究者の間に一般的になりつつあるのみならず、アメリカのジャーナリズム的な方面にもある程度浸透しつつあるかに思われるのである。

(8-12-1968)